

京都大学教育研究振興財団助成事業
成果報告書

2025年 8月 10日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会長 藤 洋 作 様

所属部局・研究科 人間・環境学研究科

職名・学年 博士後期課程2年

氏 名 中野 春子

助成の種類	令和7年度 ・ 国際研究集会発表助成			
研究集会名	記憶研究学会(MSA)第9回研究大会			
発表形式	<input type="checkbox"/> 招待 ・ <input checked="" type="checkbox"/> 口頭 ・ <input type="checkbox"/> ポスター ・ <input type="checkbox"/> その他(
発表題目	記憶の乗り物—旧東ドイツにおける草の根のノスタルジアとコミュニティの形成			
開催場所	チェコ共和国・プラハ市・カレル大学、チェコ科学アカデミー			
渡航期間	2025年 7月 13日 ～ 2025年 7月 19日			
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版1枚程度で作成し、添付して下さい。 「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()			
会計報告	交付を受けた助成金額	350,000円		
	使用した助成金額	281,000円		
	返納すべき助成金額	69,000円		
	助成金の使途内訳 (差し支えなければ要した 経費総額をご記入ください)	費目	金額(円)	
		航空運賃	111,000	
		宿泊費	90,000	
		滞在費	30,000	
学会参加費		30,000		
その他(通信・保険・ドイツ移動)	20,000			
以上に助成金を充当				
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。)ヨーロッパでの国際学会は、渡航費・参加費・滞在費が高く、これまで参加が難しい状況でした。今回の助成により、初めて英語での国際発表を行うことができ、自身の研究に関連する中東欧や記憶研究の研究者とのネットワークを構築する機会を得られました。また、ドイツでの長期フィールド調査への足掛かりともなりました。謹んで感謝申し上げます。			

成果の概要／中野春子

1. 記憶研究学会（MSA）概要

令和7年度、国際研究集会発表助成を利用し、チェコ・プラハのカレル大学および科学アカデミーを拠点に開催された第9回記憶研究学会（MSA）に参加した。本学会には約1,200名が参加し、15～20分間の個別発表やパネル、シンポジウム、講演、現代アート展示などが組み合わされた大規模なものであった。

参加者の出身地域はアジア、アフリカ、アメリカ、ヨーロッパと多岐にわたり、同じ「記憶」研究でもテーマはジェノサイド、トラウマ、戦争の記憶からノスタルジアや市民社会まで幅広い。アプローチも語りや写真、映像作品、記念碑、政治的プロパガンダ、アーカイブ、博物館など多様であり、喚起・記録・共有・操作・沈黙など様々な記憶の在り方について活発な議論が交わされた。

著名な記憶研究者であるアライダ・アスマン、アストリッド・エアル、林志弦らも参加しており、その生の声を聴くことができたのは大きな刺激であった。加えて、チェコ開催という地理的背景から中東欧や社会主義時代の記憶に関するパネルが多く、東ドイツ地域における社会主義時代の記憶を研究対象とする私にとって、最先端の議論に触れる貴重な機会となった。

2. 学会企画ツアーへの参加

本学会では、ホロコーストや共産主義の記憶に関連するプラハ市内ツアーが企画された。私はその中から、世界最大級のスタジアムであるストラホフ・スタジアムを保存・活用しようとする民間団体によるツアーに参加した。

中世の旧市街はそのまま保全され、その外側に新たな町とスタジアムが建設されたことで、ストラホフ修道院の塀を境に景観が一変する。学生寮として建てられた灰色の集合団地と広々とした庭、その奥に巨大なスタジアムが現れる光景は圧巻であった。

1926年に建設された同スタジアムは、ナチス占領下では軍事パレードやユダヤ人の強制移動の中継地として使用され、共産主義時代にはスパルタキアード（大規模なスポーツ祭典）が開催された。体制転換後は著名アーティストのコンサート会場としても利用されたが、老朽化とともに使用が減少し、現在は若手サッカー選手のトレーニングセンターとなっている。崩れかけた階段や外れた観覧席、鉄骨が露出した屋根が印象的で、鮮やかなグラフィティに彩られながらも寂れた雰囲気漂わせていた。

建築とガイドの語りを通じて、多層的な歴史の蓄積を確認できたこのツアーは、①チェコ・プラハの地政学的立場（ドイツとロシア〈ソ連〉の間）、②「プラハの春」に象徴される特異な歴史的出来事に対する住民の誇り、③負の記憶も含む巨大な過去の遺産という三つの観点から興味深いものであった。文化財指定により解体できず、修繕資金も確保できないため「生き永らえている」状態であり、本学会のテーマ「Beyond Crisis」危機を超えたその後、遺物をどうするのか、の核心を突く存在と感じられた。

3. 研究者との交流・ネットワーク構築

ツアーやパネル発表の場で知り合った研究者と晩餐会や昼食を共にしながら語り合えたことは、研究の視野の拡大とネットワーク構築の両面で大きな成果であった。

特に、社会学者の佐藤慎吾先生など、日本人で海外でも活躍する若手研究者と自身の研究内容や進め方について意見交換できたことは貴重であった。また、社会主義期の記憶に特化したパネルで質問を行ったことがきっかけとなり、中東欧をフィールドとする研究者との対話やコンタクト交換が実現した。本の交換イベントでは、アメリカへのノスタルジアを研究する博士課程院生の女性と意気投合し、学会後にハイデルベルクで再会するなど、研究面・私的な面の双方で親密な関係を築くことができた。

4. 自身の研究発表

本学会は、私にとって初めての国際学会参加かつ英語での発表の場となった。私たちのセッションは、主にポーランドをフィールドとする博士課程院生が集まり、「動き続ける記憶の媒体」というテーマで構成された。

各発表は、①かつてユダヤ人虐殺の記憶の場であったポーランドの森へのイスラエル人団体旅行と彼らが残した物品（イスラエル国旗の描かれた石や土の入ったカプセル）に着目し、それを現代世界と結びつける発表、②古い線路を修復しながら運行する鉄道作業に自ら参加し、過去の労働者たちの尽力を写真で喚起する発表、③偉人の住居が博物館化される際、その家に住み続けた女性（偉人の妻やメイド）に焦点を当て、博物館化の考え方を揺さぶる発表など、多彩で刺激的な内容であった。

私は現在の東ドイツにおいて、社会主義時代の車を今も使い続ける人々を対象とした研究発表を行い、発表後には「ナイロンカーテン」という概念や小説『Time Shelter』を紹介してもらうなど、有意義なフィードバックを得た。

5. 全体講演会『Time Shelter』著者による講演

先述の小説『Time Shelter』の著者であるブルガリア出身のゲオルギ・ゴスポディノフ氏が招聘され、ミュシャの芸術作品で飾られた市庁舎ホールにて全体講演会が行われた。

共産主義時代の沈黙について語った本講演は、戦後のトラウマ的経験をいかに記憶すべきかというパネルの議論とも呼応しており、トラウマ的経験に対処する二つの主要な方法（沈黙する／物語る）について考察していた。未処理のトラウマ的記憶は政治的に利用される危険性をはらみ、異なる形で繰り返される可能性があるという指摘は、一個人としても集団としても重要な論点である。

私自身の研究も、転換期という人生の大きな変化や、国内で地域的に矮小化された東ドイツ地域に生きる人々を対象としており、この「引き継がれ、再燃し得るトラウマ」という視点は今後深めていくべきだと強く感じた。

6. 謝辞

以上のように、記憶研究学会では充実したプログラムを経験し、初の国際学会発表を実現することができた。これも京都大学教育研究振興財団による助成のおかげであり、円安・ユーロ高という状況下でチェコでの学会参加が可能になった。心より感謝申し上げる。